

2025年度SPIO Award

SPIO Award は、毎年 Auris Nasus Larynx (ANL) に掲載された原著論文の中より、優秀原著論文1篇に対し、その著者に賞状と賞金(50万円)を贈呈しています。(ただし、筆頭著者は45歳以下) また、受賞者には日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会総会・学術講演会において講演の場が与えられます。これは平成13年から始まり令和6年までに25名の受賞者を選出しました。

2025年度は、掲載された原著論文87編の中から候補対象となる51編を英文誌委員会のメンバーで審査し、最終的に SPIO Award 候補論文として4編が推薦されました。その後 SPIO 選考委員会および理事会で選考した結果、旭川医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 佐藤 遼介 氏が選ばれました。

Ryosuke Sato : Treatment outcomes of primary salivary gland squamous cell carcinoma : A multi-institutional retrospective study in Japan
ANL. Vol.52, No.1, 43-49, 2025

令和5年度曾田豊二SPIO奨学金受領者(ナッシュビルより)

大阪大学 田中 秀憲 氏

2023年7月より、米国テネシー州ナッシュビル市にある Vanderbilt University Medical Center にて、Visiting Assistant Professor として研究を行っております。テネシー州はアメリカ南東部に位置し、その州都であるナッシュビルは州の中央にあります。日本では西海岸や東海岸の大都市ほど情報が多くないため、渡米前は不安もありました。しかし、実際に住んでみると、今ではすっかりナッシュビルでの生活に満足しています。特に気に入っている点は、①治安の良さ、②物価の安さ、③豊かな自然、④ゆったりとした生活ペース、⑤人々の温かさです。治安が良く物価も比較的安いので住む場所を選びやすく、私は大学から徒歩5分ほどの場所に住んでおり、研究に集中できる環境が整っています。自然が豊かで四季も感じられ、心が落ち着く点も魅力です。また、この地域には“Southern Hospitality”と呼ばれる文化があり、笑顔の人が多く、こちらも自然と温かい気持ちになります。そして、Vanderbilt 大学は、Duke 大学や Emory 大学と並んで“Harvard of the South”と称される南部の名門校であり、大学内の研究環境や設備は大変充実しています。そのため、研究を進める上で困ることはほとんどありません。

私は頭頸部癌手術に興味を持ち耳鼻咽喉科を志した初心に立ち返り、手術成績向上に寄与できる研究をしたいと考えていた頃、当時 Stanford 大学に在籍していた現在のボスである Eben Rosenthal 先生の「蛍光ガイド下手術」に出会いました。EGFR を高発現する頭頸部癌に対し、抗 EGFR 治療抗体である panitumumab に蛍光色素を結合させて術前投与し、腫瘍を術中に可視化するという革新的な手法です。直感的に「これはいい」と感じ、この分野を学ぶために渡米を決意しました。現在の研究室には、ボスのほか、ラボマネージャー1名、研究専任教員1名、ポスドク3名、大学院生4名、テクニシャン1名、リサーチコーディネーター4名が常勤し、ときに学部生も加わります。アメリカ人だけでなく、ロシア、パキスタン、イギリスなど多様なバックグラウンドを持つメンバーが集まり、国際色豊かな環境です。Stanford 大学時代のボスは「腫瘍を光らせる」ことに関心がありましたが、それが達成された現在は、EGFR を発現しているにもかかわらず一部の細胞が光らない理由、すなわち抗体医薬の腫瘍内不均一な分布のメカニズム解明へと研究テーマが進化しています。私は、この不均一性を生み出す“バリア”を一つずつ明らかにし克服することで、次世代の蛍光ガイド下手術の実現につなげたいと考えています。蛍光ガイド手術後の切除標本では、人体内における抗体医薬の空間的分布を直接観察することができ、これは世界的にも非常に貴重なデータです。最近では、切片が美しく作製でき、抗体医薬が鮮明に可視化された瞬間に大きな喜びを感じるようになりました。(おそらくボスは「早く解析して論文を書いてくれ」と思っているに違いありませんが…)

日本で取り組んできた研究分野とは大きく異なるテーマであったため、渡米当初は基礎から学ぶ必要が多く戸惑うこともありましたが、しかしその分、何歳になっても新しいことに挑戦できる楽しさを実感でき、多様な価値観を持つ仲間と協働する中で、多少のことでは動じない精神力や臨機応変な対応力も身についたように思います。米国での経験を通じて自身の成長を感じることができ、本当に充実した時間を過ごしています。最近では、「この研究を日本に持ち帰り、さらに発展させたい」という思いが一層強くなってきました。そのためには論文もしっかりと仕上げる必要があり、残りの任期1年を切った今、最後の追い込みに入ろうとしているところです。最後になりますが、国際耳鼻咽喉科学振興会ならびに曾田豊二 SPIO 奨学金のご支援により、このような貴重な機会を得られたことに心から感謝申し上げます。渡米前はさまざまな不安があり、とくに金銭面は大きな心配の種でしたが、同奨学金の支援によってその不安が和らぎ、挑戦するための大きな後押しと

なりました。挑戦することで得られたこの経験を日本に持ち帰り、耳鼻咽喉科・頭頸部外科学を中心とした医学の発展に少しでも貢献できるよう、今後も研鑽を積んでいきたいと思っております。



ナッシュビルのダウンタウン



研究室の仲間と